主日の福音 2025/2/16(No.1340)

年間第 6 主日（ルカ 6:17,20-26）

イエスと共にいる人は不幸の中でも幸いを得る

この前、五島中央病院で一人の入院患者に聖体を授けていたとき（そこは四人部屋でした）、隣のベッドの入院患者が耳をそばだてているような感じがしました。実際にはカーテンをしていたのでお隣の様子を目で見ることはできませんでしたが、聖体拝領の様子を共有しようとしている、そんな雰囲気が伝わりました。

特に、みことばの朗読の場面で、耳を傾けているのかな？という緊張感が伝わってきました。その方がカトリック信者だったのか、そうではないのか、もしかしたらカトリック以外のキリスト教だったのか、そこまで立ち入りませんでしたが、みことばに耳を傾けていたとしたら、今後機会があればお話をしてみたいと思いました。

今回、病院での聖体拝領、これは本当に宣教の絶好の機会だと感じました。みことばの朗読と、聖体拝領をする様子は、心の渇きを感じている人にはまたとない宣教の機会だと思います。身体が弱り、何かにすがりたいという気持ちもあると思いますが、それ以上に、心の渇きがその人の心の扉を開くのだと思います。

聖体拝領の際、朗読したみことばはヨハネ 6 章 51 節「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」ここを使いました。

儀式書には幾つか朗読箇所があって、そのどれかを選ぶわけですが、もしも、お隣の入院患者さんが聖書のみことばを聞くのが最初で最後の機会だとしたらどうだろう、ということを考えました。どの箇所、どの物語、イエスのどのようなことばが、最初で最後、みことばに触れる人に響くだろうか。

そのように考えていたとき、今日の福音朗読はとても心に響くものがありました。「幸い」について語られているのは、客観的には決して幸いとは呼べない状況です。「貧しい人々は、幸いである」「今飢えている人々は、幸いである」「今泣いている人々は、幸いである」こうした状況が、どうして幸いと呼べるでしょうか。

ところが、イエスはこの状況を「幸い」に変えてくださいます。貧しさ、飢え渇き、涙する場面に、イエスは共にいてくださるからです。イエスがそこにいなければ、貧しさ、飢え渇き、涙する場面は悲しみのどん底になりますが、神の国を用意してくださるイエスがそこにいてくださるなら、悲しみが喜びに変わります。

四人部屋の病室、おそらく誰も面識がありません。たとえばそこに一ヶ月入院すれば、たまに見舞いに来る家族だけが話し相手かも知れません。その話し相手も、15 分経てば病室を去って行きます。次に来るときまでずっと、不便な生活や病との闘いを一人耐えなければなりません。完全に、語りかける相手が存在しないのであれば、病院生活のつらさは

どれほどでしょうか。

ただ、聖体拝領を受けた患者は、入院中も神に語りかけることができます。枕元には祈祷書が置いてありました。朝晩、祈祷書の祈りで神に語りかけているのでしょう。孤独の中でも神に語りかけることができる。イエスがそばにいてくださる。その信頼で、泣きたいような状況が、幸いな状況に変わるわけです。

もちろん、私も顔を見せ、聖体を授け、神が共にいてくださることを見えるしるしで伝えることは大切です。そしていつか、悲しみのどん底が、「イエスが共にいてくれたから幸いだった」そう言えるようになって、同じ境遇の人を慰め、励ますことができる人になってくだされば と願います。

私が四人部屋に見舞ったその人は、根は明るくて物事を前向きに捉える人だと思っていますので、きっとイエス様の語る幸いを、体験によって語れる人になれると信じております。

年間第 7 主日(ルカ 6:27-38)